

ふるさと講座・自然系 「知られざるコクガンの生態を観察しよう」

コクガンは冬鳥として繁殖地であるシベリアなどの北極海から、渡り中継地の野付湾や風蓮湖に数千羽単位で渡来し、大部分は中国大陸に渡って行きます。

野付湾内は、2007年11月3日の調査で、6,353羽のコクガンが確認され、国内最大の渡来地であることがわかりました。しかし、その生態には謎が多く、現在も調査が続けられています。

この度、コクガン調査の最前線の野付半島で観察会を実施しますので、みなさんのご参加お待ちしております。

- と き 平成20年11月2日（日）
午後2時～5時
- ところ 野付半島
(集合場所-野付半島ネイチャーセンター)
- 講 師 別海町立上西春別中学校
教諭 藤井 薫 氏
- 持物等 双眼鏡・図鑑など
(郷土資料館でも貸出しします。)
- 服 装 野外で活動できる服装で、長靴を持参下さい。
- 申込方法 郷土資料館へ電話・FAX・メールのいずれかで、氏名・電話番号をお知らせください。
- 申込締め切り 10月31日（金）



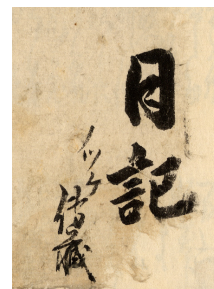
加賀家七代目の加賀實留男氏が来町されました。

9月10日（水）に「加賀家文書」の所有者 加賀實留男氏（秋田県八峰町在住）が、未寄託資料を持参し来町されました。

資料は、安政7年（1860）の年号が入った木箱入りのお膳や大甕、江戸時代に出版されたものを書き写した写本など49冊で、いずれも加賀家が江戸時代から代々使用したもので大変貴重なものです。写本は、三代目の加賀伝蔵が書き写したもので、年号や書いた場所が記述されていることから、伝蔵の足取りをつかむ良い資料となります。今後詳細な調査を実施する予定です。

なお、木箱入りのお膳と大甕は加賀家文書館に展示しておりますので、ぜひ、ご覧下さい。





根室場所での『牛や馬の飼育・使役』の様子

『日記ノツケ伝蔵』=日記に記された安政五、六年代には、子モロ(根室)ではすでに馬や牛が導入されていたことがわかります。同日記によると、「安政五年四月二十三日 エトロフ廻り馬 畠山並之助様御壺人來り 一鹿毛拾才駒 吉疋 一柿栗毛拾歳 吉疋 一栗毛九才吉疋 一青毛四才馬 吉疋 五月六日出帆」(畠山様=エトロフ足輕)と記されています。

この四頭の馬は択捉島での使役のために、「ノツケ廻り」で送られたものと思われます。当時は、すでに、馬は、乗馬用として使われていたし、「馬の通る道」は、まがりなりにもあったようです。アツケシの殿様と呼ばれていた喜多野省吾様(アツケシに役所が置かれ、クスリと子モロにその支配下の人たちが勤めていました。現代では、支庁長格か)が、子モロ場所(ほぼ今の根室支庁管内)の視察に訪れた時は船が主でしたが、やはり陸路の方が確実だったようです。文書によると、「ベツカイからトコタンまでは馬で駆け抜け、同所は満ち潮のために、トコタン川は越えられず、ここから舟で、野付半島の付け根の茶志骨川のコエトイで上陸し、トコタンからようやく追いついた馬でシベツへ到着した。」海岸に沿った道だったようで、潮の満ち引きに大きく影響されたようです。この道も今の 244 号線の元になっています。

「加賀家文書」には、「当時早馬之者」として(急用の時に使われる乗用馬として使われた。主に御用状等を運ぶ急使の者がいました。)

覚

- 一 シベツ早馬之者 番人 孫十郎(漁場の番人)
土人 鹿蔵(32歳) 福蔵(23歳) (アイヌを土人と呼称)
右之通御座候。以上
申八月三日(万延元年) 子モロ支配人代 鉄蔵印
右金井様迄書上相成候。

(同文書は「会津藩との引継文書の一つである」が、たったこれだけの文書から、幾つかのことが判ります。

- 一、シベツには既に馬が入っていて、乗用馬として使われていました。
- 一、和人だけでなく、アイヌの人たちも乗馬に慣れていました。
- 一、鹿蔵・福蔵はアイヌ名から和名に改称していました。
- 一、シベツには大番家があって、メナシ地方の元締めをしていました。
- 一、御用状などが、箱館(函館)からアツケシへ、さらに子モロへ、ここからは、「子モロ場所全域へ」伝えられました。また、子モロからノツケを通して「クナシリ・エトロフ」へ伝えられました。
- 一、シャリ(斜里)からシベツへ伝えられ、さらに子モロへの通信網もあったことになります。
- 一、子モロ場所の支配人は善吉ですが、支配人が留守の時や必要に応じては代りの者を支配人としていました。
- 一、支配人代 鉄蔵、鉄蔵は「加賀家三代目伝蔵」の兄にあたる人で、「子モロ場所の請負人藤野の通辞」として働いていました。一つの場所の経営は、支配人・通辞・帳役・番人頭(数人)・番人(各漁場の漁模様によって配置される)がいて、支配人・通辞・帳役が三役をしていました。支配人の権力は絶対的なもので、留守の時や物事の軽重によっては通辞がその代役をつとめた。(通辞は番人の中でもアイヌ語に堪能で、他の物事に通じていて、優れた人物が推薦されてなったようです。通辞は通詞ともいわれます。)
- 一、金井様は、子モロの前の勤め先はクナシリのトマリで、移動で子モロに来られた方です。前号までの「井上様の種痘」のことも登場していた金井様と同一人物です。
- 一、申八月三日 申は年号をあらわす干支といえます。万延元年のことです。この年の三月十八日に改元されましたので、安政年間は、七年の三月十七日まででありましたので、古文書には安政七年〇月〇日と記されているものもあります。

馬に関する文書はまだありますが、次は子モロ場所内の馬の頭数を記した文書を紹介します。

「加賀家文書」の中の「土人御目見附添日記」(子モロ・アツケシ・クスリ地方のアイヌが、箱館奉行へお目見えに行ったときの日記)には、馬が加添られたことが記されています。

この時は、子モロから風待ちをし、船でアツウシベツへ、ここからは馬を使う予定でしたが、雪がまだ残り、前日の大雨のために、ぬかるんで馬が使えなかったようです。(公務では、馬が使われていた)

「喜多野様・井上様・竹内様御取扱日記」(井上様-箱館奉行所組頭、竹内様-箱館奉行が蝦夷地を巡回された時の御取扱日記)やはり、船が主でしたが、子モロから四艘の船でアツウシベツで上陸し、ここからアツケシまで馬が使われました。

その様子は、人足が51人、馬は29頭使われ、その内訳をみると、子モロから19頭、アツウシベツから6頭、炭焼き場から2頭、アツケシから2頭で、このアツケシからの2頭に、御奉行様と喜多野様が御乗馬されて、一日でアツケシまで駆け抜けたようです。

また、「子モロ勤番中日記」には、「アツウシベツで、放牧していた馬が熊に襲われたので、役所へ鉄砲の借用を願い出ている。」記事が残されています。次回は「牛」のことを話題にします。(調査員 戸田峯雄)

別海町郷土資料館だより No.111

発行日 平成20年10月1日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記

11月のコクガン観察会は、沢山の方のご参加をお待ちしています。あっと驚くような数に圧倒されるはずです。加賀家文書の新規資料や以前調査した野付通行屋跡遺跡の遺物の保存処理が終わり整理作業に追われています。早く展示公開したいと思っています。(石渡)